

知的障害者・発達障害者に配慮した公共空間整備に関する研究

— 発達障害者に配慮した音響環境を中心に —

大西俊介 中園正吾 大森清博

1 はじめに

バリアフリー法の施行（2006年）に伴い旅客施設、道路および建築物等において、高齢者、障害者等の移動等の円滑化のための整備が進んでいる。しかしながら、現状では知的障害者・発達障害者に対しては、配慮の必要性は述べられているがガイドラインづくりの現場でも課題を残したままである。とくに、発達障害者の多くは音環境に対して過敏であることが知られており、イヤーマフ等の商品もあるが、吸音や音響コントロール等環境の側で抑制できることも多く、報知音や暗騒音レベル、休憩空間等についてどのように配慮すべきか明らかになっていない。

本研究は、主に発達障害者に配慮した音響環境の配慮指針を策定することを目的とする。

本研究を進めるにあたり、国内各地で開催される発達障害児・者支援関連のセミナー・講演会に出向き、参加している成人当事者及び発達障害児の保護者にアンケート用紙を配布して、年齢、性別、所属、障害（診断）名、居住地（都道府県）に加え、「苦手とする音の有無」、「苦手とする音の内容（自由記述）」、「対策の有無と内容（自由記述）」、「日常生活での支障の有無と内容（自由記述）」、「聴覚以外の感覚異常（自由記述）」について質問し、158名分を回収し、147名分の有効回答を得た。

2 アンケートの結果

結果は以下の表及び図のとおりとなった。

表1 発達障害児・者の内訳

区分	男性		女性	
	人数	平均年齢	人数	平均年齢
幼児	19	5.1(0.6)	2	5.1(0.5)
児童	58	9.7(1.9)	15	9.0(2.0)
青年	28	15.6(1.7)	7	16.6(1.8)
成人	11	27.8(10.3)	7	30.6(13.0)

表2 回答者の所属

保育所	幼稚園	小学校
9名	7名	16名
中学校	高等学校	専門学校・大学
3名	2名	3名
特別支援学級	特別支援学校	通所福祉施設
26名	40名	9名
会社員	無し	不明（無記入）
2名	2名	28名

表3 苦手な音の有無

現在有る	116名
過去に有った	31名

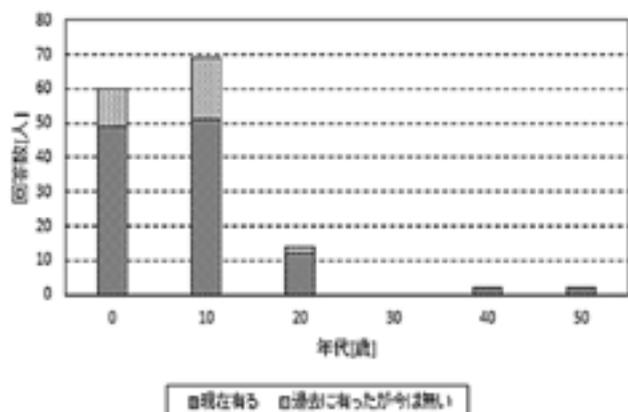


図1 苦手な音と年代の相関

表5 日常生活での支障の有無

有る	少しある	無い
22名	66名	59名

表4 苦手な音の内容

内 容	件 数
乳幼児の泣き声	27
ハンドドライヤー	19
バイクの音	11
体育大会のスターターピストル	11
掃除機の音	10
雷の音	10
打ち上げ花火	8
サイレン	7
ザワつき	7
スーパーマーケットの店内放送	7
その他(6件以下)	254
合 計	370

3 まとめ

これらの結果から、本研究のテーマである「公共空間」に関わるものであり、且つ生活する上で支障が大きく、さらに何らかの対策について可能性のあるものとして、① 乳幼児の声・泣き声（支障の内容：ファミリーレストラン等に入り辛い。）、② ハンドドライヤー（支障の内容：外出先でトイレに入れない。）、③ 体育大会のスターターピストル（支障の内容：体育大会に参加できない。）、④ スーパーマーケットの店内放送（支障の内容：家族で買い物に行けない）、⑤ 体育館の反響音（支障の内容：体育館で行われる授業や行事に参加できない。）が上げられる。

- ①については、外食産業の企業が加盟する業界団体（一般社団法人 日本フードサービス協会等）に本研究の結果を周知することによって、個々の店舗での対応を促す。
- ②については、児童が多く利用する施設の管理者に本研究結果を周知し、当該施設でのハンドドライヤー使用の再考を促す。
- ③については、教育委員会等を通じ、学校関係への啓発を行う。（アンケートの回答中には体育大会でのスターターピストル使用を中止した学校の事例も見られた。）
- ④については、スーパーマーケット事業者が加盟する業界団体（オール日本スーパーマーケット協会、一般社団法人新日本スーパーマーケット協会等）を通じ、加盟する企業に何らかの対策を促すなどの周知が必要と考える。
- ⑤については、既存の施設においては反響防止素材の追加工事、新築予定物件については、反響防止を考慮した設計・施工が望まれることなどの周知が必要と考える

なお、音の問題に関しては視覚障害者の情報獲得に支障が出ることも考えられるため慎重に対応する必要がある。